

多賀秋五郎著

唐代教育史の研究

——日本学校教育の源流——

現在我々が当面し、解決を迫られている課題は数多く存しているが、その一つに教育の問題があげられる。この際に当り、わが学校教育の出発点において之に著しい影響を与えた唐代教育一般についての研究が上梓されたことは、誠に時宜を得たものと思われる。著者が本書に「日本学校教育の源流」なる副題を附けられた所以も、ここに存することは、その序説の記述から明かである。

然らば著者は如何なる態度で此の研究を進めていかれたのであろうか。それには次の四つを挙げていられる。即ち、「唐代の学校教育を通して中国の社会と文化を歴史的に明かにする」ことに主眼を置かれ、その為には(一)過去のこの種の研究の大部分が犯した制度解説的欠陥を排し、何故にかかる制度が生れ、如何に運営され、さらに発展して行つたかというような時間的方面の考察をすると同時に、(二)この教育制度に関係ある人物が、この

制度に規定されて如何に、教育を営み、この制度を運営し、打破して行つたかという点を取りあげる。(三)社会と教育との関聯を究明せずして、教育の実態を明かにすることはできないので、社会事象との関聯において、教育の展開を考察する。(四)唐朝のもつ国際的性格により、東アジアに成立した所の、唐を中心とする教育文化圏内の教育を明かにすることによつて、唐代の学校教育をいつそう闡明にする。

以上の様な意図と方法論の上に立つて、本書は以下に示す如く六章に分つて、その研究が展開されていくのである。

第一章は「唐初三代の文教政策」が取り上げられており、唐代の学校教育制度がこの間如何なる発展を為したかを示されている。即ち高祖は最初より教育政策に熱意を示し、学校の創設に意を用いたが、その方針は決して嘗て論じられた如く隋制を踏襲するような消極的なものではなく、彼の教育に対する新たな構成と抱負に基くものであつた点に注目され(第一節)その方針は更に次の太宗に受け継がれ、この時に至り唐代の学校は最盛時

を出現したが、それを次の五点から考察するとしていられる。(一)先師先賢の問題を解決して、これを明確にさせて、教育理念を確立し、(二)国子学以下の諸学を整え、だいたい「大唐六典」に見られるような制度を完備させて、学制を整備し、(三)学舎を増築し、国子学以下の定員を増して施設を充実し、(四)当時の南学・北学の大儒・新鋭を求め、これを任用して学官を充当し、(五)教科書として「五經正義」を撰定させ、従来の諸学説を統一し、国定教科書として權威をもたせる。而してその(一)に於ては、学校の制度を詳細に解説し、(二)に於ては、南北学について、その源流・対立等を儒学史的にも述べられている。(第二節)かくの如く太宗時代には学校教育は非常な発達を遂げたが、高宗時代も後半になると次第に不振に傾いて行つた。それは一には高宗が次第に学校行政に熱意を示さなくなつたこともあるが、それと共に、五經正義の成立によつて学問が固定化し、進士科が重んぜられて文学尊重の氣風が盛んになり、学問的研究はかげをひそめるようになったことなどが挙げられるとされている(第三節)。

第二章は「唐朝を主体とする教育文化圏の成立」が論じられ、唐の国家勢力の伸展によつて成立したアジア文化圏の教育を、時代的には唐初三代に限つて取りあげて、高句麗・百濟・新羅（第一節）高昌・吐蕃（第二節）及び日本（第三節）に於て、どのように教育が行われていたかを示されている。而してこの章の大半は、第三節「唐文化と日本古代学校の教育」に割かれており、我が国の学校の創設・成長及び、唐制との比較を中心に我が古代学校教育の有様が論じられている。

第三章「学校教育の衰微と玄宗の教育政策」に於ては、先ず則天武后時代に教育が衰微した事を、(一)国子祭酒に適當な人物を欠いたこと、(二)仏寺を尊信して学校財政を顧みなかつたこと、(三)「五經正義」制定以来学問が固定化して清新さを失つたこと、(四)科擧に經学が輕視され、文章が尊重された結果經学教育を主体とする学校の存在意義が薄弱となつたという四点から説明された後、中宗・睿宗の時代を通じてこの傾向は続いたが、(第一節)玄宗時代に至つて、学官に適當な人物を得たので学校教育は振興し、それと共に学問

に於ては南学派が勢力を持つようになり、老莊の傾向が強くなつて来て、終に崇玄宗の設置を見るに至つた。又玄宗の教育振興策の中、

注意すべきものとして、中央学と地方学の關係が密接になつて来たこと、地方の学校の擴張に意が用いられ、私学の設立をも許可したことを挙げられ、特に後者は中国庶民教育史上見逃しがたい点であるとされているが、(第二節)この事について更に論じられたのが、第四章「庶民・児童教育の發達」である。先ずその教育機関としては、里学・郷学

といつた公立学校が存在すると同時に、書院・族塾等の如き、私立学校が設けられて来たことを述べられ(第一節)斯く「教育が庶民層・児童層へ拡大されると、従来のように經学を教えることよりも、もつと生活に卑近なもの、あるいは、被教育者の精神發達段階に応じたものを教えることが要求され、新しく教科書の編纂をみるに至つた。『蒙求』はその代表的なものである。」として以下児童教科書としての蒙求について、その成立、構成と表現法、内容と倫理性等について、詳しく論じられ、それが児童性を考慮して、構成

や表現に意を用いるとともに、庶民生活を重視して、内容に庶民倫理をかかげていることを述べられている。(第二節)

第五章は、「中唐の社会と学校教育の性格」について、最初にこれを四期に分つて学校の推移を見ていられる。即ち、第一期の肅宗・代宗朝は、学校が外形的に一応復興した時代。第二期の德宗朝は、内容的にも充實した時代。第三期の順宗・憲宗・穆宗・敬宗の時代は、学校教育が發展して、中庸の性格をもつともはつきりと示した時代。第四期の文宗・武宗朝は、社会の動揺とともに、次第に衰微して行く時代であるとされている。而して更に、学官・学生の性格を論じて、学生運動等にも触れられた後、(第一節)この時代の学校教育が、政治権力の相剋に巻き込まれて、どのように変えられて行つたか、(第二節)又文化との關係はどうか(第三節)というように、種々の面からの検討がなされている。

第六章「唐朝勢力の衰退と晩唐の教育」に於ては、「唐朝の政治力や経済力と消長をとらぬに於ける学校教育は、衰微の一途をたどるは

かりであつた。」といつて、この時代の学校教育が、いかに末期的様相を示したかを、この当時の学官の人物を中心として述べられている。

以上で、本論は完結しているのであるが、更にこの後に附録を加えられている。これこそ、本書の価値をして一層高からしめるものである。それは、「唐代教育関係者一覽表」「唐代教育史年表」「わが国に於ける東洋教育史研究の回顧とその文献」である。「唐代教育関係者一覽表」は唐代に教育機関に拠つた人物を、あらゆる資料から抜き出し、その任免の年月・学官に任せられる前後兼官の様相・本貫・字間・性格を表としたもので、それは延二六七十名に達する。又「文献目録」は、日本文で書かれた、或は日本文に翻訳された関係文献を内容により、十二に分類して載せられたものである。

以上で甚だ拙い筆者の紹介を終るが、以下紙面の許す限り、筆者の感じた点を述べさせて頂く。

ア文化圏のそれを附け加えられると共に、文献目録に、少くとも中国の学者の手になる論文は、翻訳の如何にかかわらず、集録されたら、尚一層裨益される所が大きいのではないだろうかと思ふ。

次に、第二章で折角東アジア教育文化圏の成立を取り挙げられながら、これを玄宗の時代に限つてしまわれ、其の後この圏内の教育が、又教育文化圏そのものが、唐朝の勢力の消長と共にどのように変化して行つたのか、といつた、著者の所謂時間的推移が説明されていないのはどうしたことであろうか。これと同様のことが、庶民・児童教育の問題に關しても言い得よう。即ち玄宗時代に、この種の機関が大いに發展したと説かれながら、それが中晩唐時代に至つて、国子監中心の学校教育と、如何なる關係を保ち、又どのような道を辿つて、次の宋代の書院時代へと發展して行つたのか。これらの諸点について、論じられていたならばと思ふ次第である。

次に本書が過去の制度解説的な教育史の域から出た優れたものであり、この点に於て著者の意図は十分に成功を納められたが、その人物の取扱ひ方、或は社会との關係に於て有機的に捉えられようとした点については、猶充分その意図が生かされていないように感じられた。確にこの書は、一人々々の人物を剋明に描き出し、社会專家の導入も充分に行われているのであるが、その割に記述が平面的であるように感じられる。更に言へば、教育史的現象及び、それに關与する人物と、社会事象とが、著者の努力にも抱わらず密接に結びついていないように思われるのである。それは著者が問題の中心を、国子監及びそれに關係した人物に置きすぎて、教育を固定した儒教主義による教育としてのみ扱われたことと、社会との結びつきを、一方が常に他から影響を受けると、受動的にしか扱わず、能動的な面を考慮されることの少い点にあるかと思われる。教育が社会に及ぼす影響は決して軽視すべきものではない、ように考えられるが、その点本書が、唐代の教育が、その社会に及ぼした結果について充分に触れられなかつた点が、この書の瑕疔となつている。

以上、自己の未熟を顧みぬ妄言の多かりし事を深く謝して、筆を置くことにする。(A)

5版、四五〇頁、価八〇〇円、不昧堂發行)

——(狩野直順)——

Samuel Bernstein,

The Opposition of French
Labor to American Slavery.

Science & Society,

Spring 1953 (Vol. XVII, No. 2)

南北戦争をめぐる諸研究は、近時めざましい発展をみせているが、とりわけ注目すべきは、「第二次アメリカ革命」がもつている國際的衝撃力への関心が高められつつあることである。すなわち、奴隸制の存続をめぐる北部と南部の抗争は、理念的には民主主義自由主義の展開を、制度的には自由貨銀制の確立をめぐつて、國際的に広汎な影響をあたえたところである。そしてその場合、ヨーロッパにおける反応は、労働者階級を中心として、奴隸解放に同調する急進勢力と、それに反対して対米干渉を行おうとするブルジョワ支配者層の保守勢力との対決という形に要約される。ここにとりあげたS・バーンスタイン(ニュー・ヨーク市立大学)の一文も、右の

点に注目しつつ、とくに未開拓なフランスの事情を、労働者の動きを中心にとらえようとするものでもある。以下にその要旨をかげてみよう。

序

南北戦争の影響力は國際的なひろがりをもつており、とくにその経済的イムパクトは棉花および小麦その他の食料供給を通じて英仏兩國に強く波及せずにはおかなかった。そのため英仏兩國においては、所謂「棉花饑饉」が生じて産業資本家ならびに労働者の両階級に大打撃を与えた。この結果、英国のパーマーストーン政府、およびフランスのナポレオン政権は、国内の木綿産業につらなる産業資本家、大商人等の要請にもとづいて、対米干渉を行い、南部の支援、奴隸制の存続をこころみようとした。一方労働者階級を中心とする勢力は、「棉花饑饉」による失業、操短等に苦しみながら、たえず北部の奴隸解放運動に同調しつつ、国内および國際的進歩勢力を結集して支配者層の対米干渉政策を牽制しつづけたのである。この場合、英国労働階級がその主役になつたことは間違いないし、最

近の諸研究もつばらこの点に集中されているのも当然といえよう。しかし吾々はこの際、一歩すすんでこれ迄見逃されて来た重要な事実、すなわち、フランス労働者もまたアメリカにおける反奴隸制運動を促進せしめたのだという事実注目しなければならぬであらう。ここでは、第二帝政下のフランス労働者の動きを、南北戦争とのつながりを通して考え、新しい研究へのサジェストを求めよう。

一

南北戦争による棉花饑饉(cotton famine)がフランスに及ぼした影響は、その産業資本主義、とりわけ木綿工業の後進性のため、英国における程甚だしいものではなかつたが、それにしては次の如きはげしさをもつていた。すなわち、一八六〇年におけるフランス木綿工業は、約七〇万俵の棉花を必要とし、その大部分を合衆国よりの輸入に仰いでいたが、北部海軍による南部諸港の封鎖によつて、六一年九月には入荷値が一九一一俵に激減した。また、当時の木綿工業労働者は一三〜四万人で、家族および同系産業労働者を合計す